

自然と人間シリーズ 11

信濃の四季

田中清光

自然と人間シリーズ 11

信濃の四季

田中清光

スキージャーナル

た なか きよ みつ
田 中 清 光

1931年長野県に生まれる。

詩誌『アルビレオ』『今日』『オルフェ』などに参加。日本現代詩人会会員。主な著書に詩集『黒の詩集』『収穫祭』（ユリイカ）『にがい愛』（弥生書房）『星衣奔放・幻花』（湯川書房）『山脈韻律』評論集『立原道造の生涯と作品』『詩人八木重吉』（麥書房）エッセイ集『蝶の道』（青娥書房）など。現在は国分寺市戸倉に住む。

信濃の四季

昭和五十二年十月三十一日 第一刷

著 者・田中清光

装 幀・亀倉雄策

発行者・滝 泰三

発行所・株式会社スキージャーナル

東京都千代田区九段南二―四―一〇

電話・東京（二六三）三四二一

振替東京（〇）―三三五〇四

印 刷・清和印刷株式会社

製 本・株式会社三祐社

0093—710311—3731 © K. Tanaka

信濃の四季

人里への旅

木曾で聴いたもの……………9

安曇野への想い……………14

伊那路の旅……………23

諏訪の英雄たち……………33

松本の光と風……………42

雪の旅……………50

過ぎゆく時に

早 春……………59

こころの山

奥穂高岳……………77

山恋い・鹿島槍……………81

針ノ木の霧……………85

上高地通信……………89

雨の蓼科山……………99

美ヶ原の日々……………103

山の詩篇

冬の牙……………117

宿場と街道

峠と宿場……………139

中山道雑記……………178

北信濃の旅

春の雪……………185

季節の断章

峠の歌……………205

角間峠物語……………217

夏の断章……………227

すぎゆく晩夏に……………236

みえないもの

ジャンプ……………245

想い出の山野

古塔の見える村里……………263

御牧ヶ原……………	271
城の町……………	274
上田という町……………	278
はじめての山……………	288
戸隠山の想い出……………	293
妻科の雨季……………	302
ひとつの山……………	310
あとがき……………	317

人里への旅

木曾で聴いたもの

木曾福島の町で、夜更けに聴いた木曾川のせせらぎの音はこころよく耳に残った。それがひっそりと寝静まった夜の底を、ざわざわと流れつづけるひびきは、いつまで眼を閉じていても聴き飽きることはない。いつのまにか浅い眠りに落ちこむと、その音は眠りの中にまで流れこんできて鳴りやまないものである。

その夏の夜、町の古い宿に私は泊まった。冷房などというもののない二階の部屋だったが、窓を開け放つと涼しい夜風が流れこんでくる。機械で冷やすよりその方がよほど有難かった。

夕食は古いお膳に載せられてくる。酒はもちろん木曾の地酒だった。旅に出たらその土地の産物を食べ、土地の酒を味わうことが、たのしみのひとつである。

その夜の酒は旨かった。木曾駒を歩いてきた昼間の渇きのせいもあったが、やはり木曾の爽やかな夜気が舌と酒との間にはさまって、味覚を造り出したのであろう。宿のひとに酒の銘柄をたずねた。

その銘柄を聞いて、ふと私は蒲原有明のことを思い出した。

ここになぜ木曾とはゆかりのありそうもない詩人が出現するのかということになるが、じつは有明が木曾地方へ旅をしたときのことを書いた随想の一節を想い出したのである。そこに書かれていた酒の名が、いまこうして私の飲んでいる酒と同じなのであった。有明は書いている。

木曾旅行の途次、贅川の宿で乗合馬車が暫くのあひだ停つてゐた時のことである。折柄鉄道工事の最中なので、大勢集つてゐた工夫たちにまじつて、名産の「ななわらひ」を一杯試みた。今湯上りの泡盛が、鶴見にそれ以来の快味を覚えさせたのである。〔夢は呼び交す〕より〕

鶴見とは有明自身のこと。これはあるとき岩野泡鳴に誘われて銭湯の帰りに泡盛を飲んだところそれがたいへん旨くて、かつて木曾旅行で味わつた酒の美味を想い出している文章である。

明治のこのときに、詩人の飲んだのと同じ銘柄の酒がいまこうして目の前にあり、黒光りした床柱や鴨居を見ながらその液体を口にふくんでみると、有明の時間がいまも現前してくるような錯覚にとられる。

さまざまな変化は、もちろん酒の味にも風物にもあるだろうが、ここで酒の名がきっかけとなつて、いきなり明治の詩と時空を喚起することができるというのは、ここを流れている夜の時間が、逆行性をもっているからなのかもしれない。これが都会の夜だったとしたら、とてもこうはゆかないだろう。この町を流れている個有の時間が、重たく感じられてくるのである。過去に向かつて開かれている時間が、ここにはある。

その夜は「みこしまくり」という祭の夜であった。夕食のあとに、ようやく聞こえはじめた人々の叫びが、これも過去からのようにひびいてきたのである。大勢のざわめきの中から、激しい雄叫びの声と、地響きの音が地を這うようにして、次第に鮮明に迫ってきた。その声は、どうやら、「宗助、幸助」と交わる交わる叫んでいるのである。（これは水無神社の祭で「宗助、幸助」というのは、飛驒からご神体を持ってきた二人の木曾大工の名であるという。）

ずしんずしんと響いてくる重たい地響きは凄まじかった。巨大な神輿を祭の名のとおり地上に転がしてくる轟きなのである。

私は戸外へ飛び出した。そして眼前に、荒々しい一群の人々が口々に叫びながら、重さ四百キロという白木の神輿をまくり上げてはひっくり返し、ひっくり返しして路上を転がしてゆくさまを見た。いうまでもなく神輿はそのたびに傷み毀れてゆく。

見物人や、まぐる人々の興奮の中で逆立ち、雪崩れ落ちるようにひっくり返される白木の神輿は、もはや叫ぶ人々の燃えさかる情念の塊りとなったように見えた。

その叫びと轟きは、夜更けまで町の中を転がりつづけた。私は床に入ってもなかなか寝つかれず、最後にはかつぎ棒が残るだけだという毀れてゆく神輿の姿を想い浮かべていた。そのときのことである、木曾川のせせらぎがにわかにさやかに聞こえはじめた。

木曾節は誰もが知っている民謡であるが、商売で歌手が入れたレコードなどは、じつはとても聞くに堪えない。

少年のころ、福島町のひと夏を過ごしたことがあったが、夏の夜、踊りの輪の中から木曾谷の佐しい町に哀しげに反響していた土地の人々の肉声が、いまもって耳の底を離れない。そして三十年も経ったある夏の夜に、まったく久し振りに福島町のそれとほぼ同じ肉声を耳にすることができたとき、思いがけないすばやさで、少年の日の記憶が一氣によみがえってきた。

暗い夜空に星がびっしりと瞬き、黒々とそばだつ両側の山なみのはさまに帯のようにひっそりとななる古い町の夜の燈火のなかに、ぼうと浮かび上がる踊りの輪。そこでゆるやかに、むせぶように歌われる歌声は長く尾をひいて、めぐりの峡谷にいくどもいくども木霊しつづけるのであった。静まりかえった山峡の町で聞くのが、木曾節の調べにはいちばんふさわしい。しかもそれは商業用のレコードに入る旋律とリズムではなくて、この谷あいの空間と土地の人々の血のなかに受けつがれてきたふしぎに素朴で哀愁を帯びた調べなのである。

因みに木曾踊は「信濃奇勝録」に描かれているように古い由来をもつが、木曾節の方はへ中乗さんという歌が明治以後に古調にとって替わったもので、それにつれて踊りも作り直された。ところでその中乗さんには、木曾川筏流しの中乗とする説や御岳行者の中座説など、諸説があつてなかなか面白い。

こうしてみると私の木曽は、聴覚の中でまだ純粹に生きているらしい。

木曽川のせせらぎ、神輿の掛声や地響き、木曽節の調べ、そうした音響空間の織りなしている峡谷の町は、ふかく耳を澄ましていると、独自の語りかけをしてくれてやまない。

それは有難いことに、現代の商業主義のさまざまなおぞましい意匠をくぐりぬけて、直かに過去から現在を貫いて流れるひびきとして、耳に届いてくるのである。

安曇野への想い

I

はじめて安曇野の風物が視界を掠めていったのは、少年時代のことであった。松本から大糸線に乗ったのであるが、そのとき通り過ぎた駅舎が小さく侘しく記憶のフィルムの一齣にいまも写っている。そのフィルムも次第に黄ばみぼやけてしまったが、そのとき憶えた山の名はなぜか有明山であった。

だがそんな出来事は誰の過去にもある一過性のことで、ほんとうの安曇野との出会いとはいえない。それでも不思議なことに、いまでも大糸線に乗るときには、そのときの駅舎や山の姿がセピア色に褪せたまま、現在の風景にうつすらとだぶって浮かび上がってくるのである。

山へ登るときには安曇野は、通り過ぎる場所である。けれども大糸線が松本の街はずれの川を渡って新しい平に走りこむとき、誰もが西の窓に姿を見せた山々の壁と、その麓に広がる野の風景に、おもわず挨拶を送りたい気持になるだろう。それはいつも山行の緊張と興奮とをめぐめさせる序章、前奏曲としてやってくる。私たちは山のふところに抱かれた野の展開に、最初の絃楽器のアンダンテと懐かしいオーボエのひびきを聴きとる。